

氏名 (生年月日)	ハヤシ 林	マサ 雅	コ 子	(1993年2月16日)
学位の種類	博士 (心理学)			
学位記番号	文博甲第161号			
学位授与の日付	2023年3月16日			
学位授与の要件	中央大学学位規則第4条第1項			
学位論文題目	大学生における日常生活や学業への無気力に関する心理学的研究 —過去・現在の対人関係と無気力に対する感情に着目して—			
論文審査委員	主査 高瀬 堅吉 副査 山科 満・下坂 剛			

内容の要旨及び審査の結果の要旨

(1) テーマ設定に関して

林雅子氏は「大学生における日常生活や学業への無気力に関する心理学的研究—過去・現在の対人関係と無気力に対する感情に着目して—」というテーマで研究を行った。日本において、大学生を対象とした無気力研究では、ふたつの視点が混在したまま検討が行われてきていたことが指摘されている。ひとつはスチューデント・アパシーの視点、もうひとつは抑うつ視点である。前者は学生の本業である学問に対して選択的に意欲の減退を示し、精神病による無気力とは異なるが、後者は、日常生活全般に意欲の減退を示し、無気力化した状態と抑うつ状態を等価的に扱っている。さらに、抑うつ的な無気力では、臨床研究と調査研究で対人関係と無気力との関連の見解に違いが見られている。臨床研究では、過去の親の過保護・過干渉な養育態度、友人に対するふれ合い恐怖と、無気力の促進との関連を示唆していた。調査研究では、現在の親や友人からのソーシャル・サポートと無気力の抑制に関連があるとされている。即ち、臨床研究と調査研究で着目している対人関係の時間軸の相違から、無気力との関連の仕方に違いが表れている。また、抑うつ的な無気力とスチューデント・アパシー的な無気力の混在の一端として、調査研究では無気力に対する感情が見落とされていることが考えられた。抑うつ的な無気力の学生は、憂鬱や落ち込みの気分が続くとされている。一方で、1970年代に臨床研究が行われていた当初、スチューデント・アパシーの学生は自分の状態に焦燥感や不安といったネガティブな感情を持たず、留学や退学の危機に瀕して周囲から言われてようやく相談室に赴くことが報告されている。つまり、学業に対して選択的に意欲が減退している場合、あまり自分の状態を深刻に捉えず、焦りや不安のようなネガティブな感情を抱きにくい。しかし、無気力の調査研究で使用される尺度では、こうした無気力に対する感情については触れられておらず、言及されるのは自分が特定の場面にて意欲が減退しているかどうかのみであった。だが、スチューデント・アパシー的な無気力は必ずしも学業のみに意欲の減退を示すとは限

らない。学業に対する意欲の減退を中心に勉学の場合への意欲の減退が見られたり、時間の経過により深刻化したりすることがある。何に対して意欲が減退しているかという点だけでは、全般的な意欲の減退が見られる抑うつ的な無気力との弁別は難しい。

質的に異なるふたつの視点の無気力が区別されずに研究が続けられると、それぞれの無気力に適した予防策や支援を講じることが難しくなる。そのため、林氏は研究のなかで、抑うつ的な無気力と、スチューデント・アパシー的な無気力それぞれの特徴を明らかにしていった。林氏は、抑うつ的な無気力について、臨床研究と調査研究の両者の見解を繋ぎ合わせ、過去と現在の対人関係が、無気力とどう関連するか検討した。調査研究では現在の対人関係からのソーシャル・サポートが無気力の抑制に効果的であると見解を示し、一方で、友人との関わりを避ける傾向のある大学生は、ソーシャル・サポート受容が低く、援助要請も回避し、学校適応感も低いことも合わせて示していた。友人に対してふれ合い恐怖を持ち、一定の距離を保っていた状態の場合、その後に必要な場面で友人からの支援を求めにくく、よりストレスや悩みが深刻化しやすいことが考えられる。現在だけでなく過去の対人関係と抑うつ的な無気力との関連を検討することで、無気力に対する支援をより効果的に行う方策を考えることができると林氏は論文のなかで述べている。

次に、林氏は、スチューデント・アパシー的な無気力について、大学生の無気力に対する感情に着目し、大学生がスチューデント・アパシー的な無気力をどう捉えているのか明確化していった。臨床研究で大学生の学業に対する意欲の減退が指摘された1970年代と現在とで、学生を取り巻く環境は異なる。多くの大学が、学生が主体的に学ぶ機会を設けつつあり、学生自身も授業に対する態度は「まじめ化」している。また、現在はコロナ禍により、友人関係を始め大学での交流が減少している。授業自体には出席できている一方、周囲との比較の機会が少なく、学業への意欲減退があっても、それほど焦りや不安が生じにくい状態であると考えられる。現在の一般学生におけるスチューデント・アパシー的な無気力の新たな特徴が見られるか検討することが求められると、林氏は論文のなかで述べている。

以上のように、混在した大学生の無気力の視点を整理し、臨床研究の示唆を踏まえて無気力の検討を行うことは、現在の大学生の無気力の実態を明らかにして、適切かつ早期の段階での支援に繋がられる可能性がある。そのため、林雅子氏の博士学位請求論文は、テーマ設定に関して、問題設定がこれまでの研究に対して重要な意味を持ち、問題意識が明確かつ課題設定が合理的であると考える。

(2) 研究方法の適切性に関して

大学生の無気力研究で残された問題点に鑑み、林氏は自身の研究で以下の2点を明らかにすることを試みた。

第一に、過去と現在の対人関係が、抑うつ的な無気力と関連があるのかを検討した。

第二に、スチューデント・アパシー的な無気力とそれに対する感情に着目し、大学生が無気力を如何に捉えているのかを検討した。

これらを踏まえて大学生の無気力の実態をより正確に把握し、早期の段階での適切な支援策を講じることを林氏は研究の目的とした。同氏の研究は文献研究、実証研究を織り交ぜ、実証研究では質問紙を用いた横断調査、縦断調査を展開し、特に縦断調査では複数時点での同一対象者への回答を得た際のデータの結合について、個人が特定されない匿名性を担保した形で適切に行われていた。加えて、分析方法についても量的研究のうち横断研究においては、変数の分布に応じてポアソン回帰分析と階層的重回帰分析を使い分け、縦断研究においては3時点のデータに対して潜在曲線モデル及び条件付き潜在曲線モデルによる適合度指標を用いた高度かつ適切な分析が行われていた。さらに質的研究では、面接調査も実施して、得られた結果は修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて適切に解析された。林氏の研究は、その目的を達成するためにふさわしい研究方法が用いられており、さらに必要な研究上の倫理に対して適切な配慮もおこなわれていたと考えられる。

(3) 論文構成と論理性に関して

林雅子氏の博士学位請求論文は文献研究、実証研究、総合討論から成り、全体で8章から構成されている。第1章は文献研究、第2章から7章までが実証研究、第8章が総合討論である。

第1章では、これまでの先行研究のレビューをし、林氏の研究の目的と方針を明らかにした。第1節では、現在、無気力がどのように定義づけられているのかを述べた。第2節では、海外研究と比較しながら日本における無気力研究の流れを整理し、先行研究における限界点を述べた上で、それを改善する方法として林氏の研究の方針を提示した。第3節以降は抑うつ的な無気力、スチューデント・アパシー的な無気力それぞれについて述べていった。第3節では、過去と現在の対人関係が抑うつ的な無気力とどう関連していると考えられるか、親子関係、友人関係、教師との関係それぞれ整理を行った。第4節では、抑うつ的な無気力とは異なる特徴として、スチューデント・アパシー的な無気力に対する感情に着目し、コロナ禍において大学生が無気力をどのように捉えているのか検討を行った。これらを踏まえて第5節では、林氏の研究の目的と研究方法、構成をまとめている。

第2～7章の実証研究は大きくわけて3段階の構造を持つ。第1段階として第2～4章があり、第一の目的を明らかにするために大学生の抑うつ的な無気力と、過去と現在の対人関係に関して検討を行った。第2段階として、第5、6章では第二の目的を明らかにするために、スチューデント・アパシー的な無気力とそれに対する感情に着目した調査を行った。第3段階の第7章では、第一、二の目的のまとめ上げとしてスチューデント・アパシー的な無気力に付随する様々な場面での無気力と、それに対する感情が、対人関係とどのように関連するのか検討した。

第2章では、養育者と抑うつ的な無気力との関連を検討した。第1節では過去の養育者の養育態度が無気力と関連があるのか、第2節では現在の養育者からのソーシャル・サポートが無気力と関連するのか見ていった。得られた知見としては、過去の養育者のうち母親を想定した場合に無気力と養育態度の関連性が逆相関で強まり、現在の養育者のうち母親からのソーシャル・サポートは無

気力を低減する影響がみられるというものであった。第3章は、友人関係と抑うつ的な無気力との関連を検討した。第1節では過去の友人に対するふれ合い恐怖が無気力と関連があるのか、第2節では現在の友人からのソーシャル・サポートが無気力と関連があるのかそれぞれ検討を行った。得られた知見としては、過去の友人のうち同じクラスや親友を対象としたふれ合い恐怖が無気力に影響を与え、現在の友人のうち同じ大学・専攻や部活サークル仲間からのソーシャル・サポートが無気力を低減するというものであった。第4章では、教師と抑うつ的な無気力との関連を検討した。第1節では過去の教師に対する信頼感が無気力と関連があるのか、第2節では現在の教師からのソーシャル・サポートが無気力と関連があるのか検討していった。得られた知見としては、過去と現在の双方において女子においてのみ教師への信頼感やソーシャル・サポートが無気力に影響しているというものであった。

第5章では、スチューデント・アパシー的な無気力とそれに対する感情が時間の経過によって変化が見られるのか縦断的に検討を行った。まず、調査開始時点で学業に対して意欲が減退していると、それに連動して焦りや不安といったネガティブな感情を抱くのか調べた。次に、時間の経過によって、学業に対して無気力であることにネガティブな感情が高まり、他の場面に対しても意欲が減退するのか分析した。得られた知見としては、潜在曲線モデルにおいて無気力は切片の平均と分散のみ有意で傾きの有意差がみられなかった一方で、無気力に対する感情においては傾きの平均や分散に有意差がみられ、縦断的变化が認められたことと、学業意欲低下を加えた条件付き潜在曲線モデルにおいては学業意欲低下が無気力を強め、無気力に対する感情にはネガティブな影響を及ぼしているというものであった。

第6章では、スチューデント・アパシー的な無気力の形成過程を半構造化面接によって調べていった。どのようなきっかけで無気力に陥り、無気力状態からどのように回復し意欲のある状態を維持しているのかストーリーラインを立てた。また、スチューデント・アパシー的な無気力に対人関係との関係はあったのか、自分が無気力であることをどのように捉えていたのか、学業以外の場面でも無気力を感じていたかどうか併せて調べた。

第7章では、それまでの研究を踏まえ、過去と現在の対人関係と無気力、無気力に対する感情との関連を検討した。スチューデント・アパシー的な無気力の傾向が高い学生は他の場面に対する無気力と、それに対する感情が、過去と現在の対人関係とどう関連するのか、詳しく見た。得られた知見としては、過去の対人関係や現在のソーシャル・サポートが無気力や無気力に対する感情に影響するというモデルは学業意欲低下得点が高い群においてだけでなく、低い群においても有意な結果が認められ、スチューデント・アパシー的な無気力は健常群と病理群といった明確な区別によってとらえるよりも連続性のある概念としてとらえることの適切性が示唆された。加えて、コロナ禍の前後で各変数の比較を行った分析では、無気力の一部やソーシャル・サポートはコロナ禍前の方が高いが、ふれ合い恐怖の一部はコロナ禍後の方が高いといった知見が得られた。

最後に、第8章では、林氏は研究で得られた知見をまとめ、これまでの文献研究と実証研究から総合的な議論を行った。第1節では第2～7章で得られた知見を整理し、第2節で大学生の無気力の

討論を示し、最終的な結論を述べた。第3節では、自身の研究から得られた今後の展望を述べた。林氏の論文について、論文全体の構成は適切で明確な結論へと導かれており、考察の展開が論理的に必要な論証がなされていると考えられる。

(4) 論文の形式に関して

林雅子氏の学位請求論文は、用語や文体が正確かつ明晰であり、図表やデータ等が適切に用いられている。また、参考文献・資料等の引用や注記が適切におこなわれていた。

(5) 独自性と意義に関して

林雅子氏の研究は大学生の無気力の実態をより正確に把握し、早期の段階での適切な支援策を講じるために、1) 過去と現在の対人関係が、抑うつ的な無気力と関連があるのか、2) スチューデント・アパシー的な無気力とそれに対する感情に着目し、大学生が無気力を如何に捉えているのか、この2点を明らかにしていった。上記について大学生の男女を対象に、横断調査、縦断調査、面接調査を含めた6つの調査を実施し、以下の成果を得た。

まず、1) について、林氏の研究では臨床、調査研究の見解を繋ぎ合わせて検討を行い、次の4点を明らかにした。第一に、現在の養育者、友人からのソーシャル・サポートが無気力の抑制に関連があるとわかった。これは、これまでの調査研究で得られた知見と合致する。林氏の研究ではさらに、どのような相手からのソーシャル・サポートが有効か明確にした。養育者では、母親からのソーシャル・サポート、友人関係では、同じ大学・専攻または部活・サークル仲間からのソーシャル・サポートが関連することが示されていた。

第二に、過去の対人関係が無気力と関連することが実証された。過去の友人に対するふれ合い恐怖が、大学生の無気力の促進と関連が見られた。臨床研究の見解を証明したと言える。この結果から、現在の大学生の無気力にアプローチする際に、過去の友人関係の在り様を考慮することで、現在の母親や友人からの支援をより効果的に発揮することができると考えられる。

第三に、過去の養育者の態度は無気力と関連しないことが示された。スチューデント・アパシーが報告された当初、大学生の無気力は過去の親の養育態度との関連が臨床研究において注目されていた。その後、調査研究に移行したことで、対象が相談室に訪れる一部の学生から一般学生全体へと拡大した。臨床研究で示唆された過干渉・過保護な養育者の存在が相対的に減ったのであろう。一方で、養育者からの情緒的な関わりも無気力との関連が見られなかった。現在はコロナ禍により大学生は自分から行動を起こすことが難しい。過去に養育者から自立を促す態度を取られていても、実際の行動に繋がりにくい状態にあったことが推測された。

第四に、女性の場合、過去・現在の教師との関係が無気力と関連があった。これまでの無気力研究では教師に関する言及は少なく、親や友人との関連の方が重視されていた。だが、女性は多様な対人関係を取る傾向にあり、現在は大学が「学校化」しつつあるため、大学の教師に対しても高校生と同じような支援を求めていたと推測された。

第一、第二の点はそれぞれ調査研究と臨床研究での見解を裏付けるものであった。これは、時代的な変化や環境にあまり影響されない、抑うつ的な無気力の特徴であると考えられる。友人関係を中心に、過去の対人関係の取り方に着目することで、現在の大学生の無気力に効果的な支援を講じることができると考えられる。第三、第四の点は林氏の研究で得られた新たな知見である。コロナ禍や大学の「学校化」など大学生を取り巻く環境の変化が影響していると考えられる。臨床研究では厳しい父親の存在など、無気力の大学生の家庭環境に注目していたが、現在の大学生はむしろ、友人や教師など、学校や大学での対人関係を重視している。大学生の学習環境を整えることが大学生の抑うつ的な無気力の抑制に繋がるのではないかと考えられる。林氏の研究は、臨床、調査研究の見解を併せて検討することによって、現在の大学生の無気力の実態を正確に把握する一助になったと言える。

続いて、2) について、スチューデント・アパシー的な無気力とそれに対する感情が時間の経過の中でどのように変容していくか検討したところ、次の事柄が明らかになった。まず、スチューデント・アパシー的な無気力は、無気力に対する焦りなどネガティブな感情と連動していないことがわかった。これは臨床場面における示唆を支持するものであり、憂鬱な気分が続く抑うつ的な無気力とは異なる、スチューデント・アパシー的な無気力の特徴であると言える。また、林氏の研究ではスチューデント・アパシー的な無気力の新たな特徴が見出された。ひとつは、自分が無気力であることにネガティブな感情は抱いていない一方で心のゆとりをなくしており、その後の心のゆとりの増減に無気力が影響していなかったことである。もうひとつは、学業への意欲が減退するほど、将来に対する意欲の減退も起こっていたことである。スチューデント・アパシー的な無気力は学業に対して選択的に意欲が減退するもので、日常生活全般に意欲が減退する抑うつ的な無気力に比べて程度の軽い状態であるとされていた。さらに、現在の大学生は「まじめ化」して授業そのものには参加しているため、無気力であると周囲に気づかれにくい。だが、スチューデント・アパシー的な無気力の学生は、実際のところ自分の状態をそれほど楽観的に捉えているわけではなく、将来に対する見通しも失っている。早期の段階での支援が求められる。

次に、スチューデント・アパシー的な無気力は、周囲の環境からの影響が大きいことが林氏の研究から示唆された。大学生は、周囲が学業に対して積極的でないと、それにつられて学業が疎かになり、反対に学業に対して意欲のある周囲の場合は、それに触発されて学業への意欲が向上していた。スチューデント・アパシー的な無気力へのアプローチとして、本人に働きかけるだけでなく、学業意欲を維持しやすいような環境を整えることも有効であると考えられる。それに加えて、大学生が意欲のある状態とない状態をどう捉えるかによって、無気力に対する感情が異なっていた。無気力研究において、大学生の無気力は怠学傾向に繋がる不適切な状態と見なされていた。しかし、大学生の中には、意欲のない状態も普通のこととして捉え、無気力を比較的肯定的に受け入れている者もいた。無気力の多様な側面を理解することが必要である。スチューデント・アパシー的な無気力は、自分の将来に対する意欲の減退も見られることを既述していた。林氏が面接調査を行った際も、部活やサークル、アルバイトといった学業以外の場面での意欲の減退が見られており、スチ

ューデント・アパシー的な無気力は学業以外にも意欲が減退することが示唆された。こうしたスチューデント・アパシー的な無気力に付随して生じている意欲の減退は、抑うつ的な無気力と同様に対人関係との関連が見られるのか、林氏は検討を行った。その結果、スチューデント・アパシー的な無気力に付随して起こる意欲の減退でも、過去・現在の友人関係、教師との関係が関連することが見出された。対人関係との関連について抑うつ的な無気力と類似した結果が出ることも、抑うつ的な無気力とスチューデント・アパシー的な無気力の混在が起こった一因なのだと考えられる。だが、抑うつ的な無気力とは異なる結果が見られる点もあった。過去の教師に対する不信感、抑うつ的な無気力の場合、意欲の減退の促進に繋がっていた。一方で、スチューデント・アパシー的な無気力の場合はむしろ意欲の改善と関連していた。類似してはいても、抑うつ的な無気力とスチューデント・アパシー的な無気力はやはり質的に異なるものであり、それぞれに有効な関わり方も違うことが考えられる。加えて、無気力に対する感情については、対人関係とあまり関連が見られなかった。ここでも、無気力に対して焦りや不安を伴わない一方で、心のゆとりがあるわけでもないことが示されていた。スチューデント・アパシー的な無気力の改善については、他者からの支援よりも、無気力の大学生自身が学業への意義を見出せるような環境の整備が重要であることが示唆された。

最後に、コロナ禍において、無気力と対人関係に変容があることが見出された。コロナ禍で他者と交流する機会が減ったことが、無気力の抑制や教師に対する不信感を抑えることに繋がった一方で、過去の友人に対する関係の深めにくさを強めることにも繋がっていた。今後無気力研究を行う際は、コロナ禍による影響に留意する必要があると言える。

林氏の研究では、大学生の無気力の実態を把握し適切な支援策を講じるために、抑うつ的な無気力と過去・現在の対人関係との関連、スチューデント・アパシー的な無気力とそれに対する感情に着目し検討が行われた。抑うつ的な無気力には、養育者、友人、教師と多様な対人関係からの支援が有効であることが示された。さらに、大学生本人の属性や他者との関係性によって、支援の有効度合も変わってくるが見出された。加えて、これまで臨床研究での示唆に留まっていた過去の友人との関係も無気力と関連していることが実証された。現在の対人関係から無気力を支援する際には、大学生の過去の友人関係の取り方が支援の求めにくさに繋がっていないか、注目する必要があると林氏は述べている。また、過去・現在の教師との関係が無気力と関連が見られ、教師は現在の大学生にとって重要な存在になりつつあることが推測された。スチューデント・アパシー的な無気力について、大学生は周囲の環境によって悪い方向にも良い方向にも流されやすいことが林氏の研究から推察された。自分がスチューデント・アパシー的な無気力であることに対して、ネガティブな感情を伴わない一方で、心のゆとりもなくしており、大学生は決して無気力を楽観的に捉えているわけではないことが明示された。ただし、大学生の中には無気力の状態を受容する者もいた。スチューデント・アパシー的な無気力を全面的に良くない状態として捉えるのではなく、多様な側面を理解し、学業への意欲を維持しやすい環境を整えることが求められる。

これまでの無気力研究では、臨床研究から調査研究へと研究の中心が移行する中で、臨床研究で

見出されていた過去の対人関係と無気力との関連や無気力に対する感情の視点が欠落していた。その結果、調査研究において無気力の一面的な部分のみ焦点が当てられ、無気力の不鮮明さを招いていた。林氏の研究では、現在だけでなく過去の対人関係とも関連があるのか、学業への意欲の減退とそれに対する感情は時間の経過によってどう変容するのか、学業以外への意欲の減退も見られるのか、時間軸や対象を広げて大学生の無気力を検討した。それにより、臨床研究における示唆と調査研究における見解を擦り合わせただけでなく、現在の大学生特有の無気力の特徴を見出すことができた。今後は、複数の大学で広範囲な調査を行い、長いスパンでの縦断調査や面接調査を行っていくと林氏は述べていた。より広い空間、時間軸の中で無気力を捉えることで、研究の整合性を高め、無気力の新たな側面を明確化できると考えられる。以上から、林氏の研究は、出された結論や論証の方法などにおいて、独自性と学問的意義・社会的意義を持っており、今後の研究への発展可能性を持っていると考える。

(6) 不正行為に関して

林雅子氏の研究では、資料に対し、捏造、改ざん等の不正な取り扱いをしておらず、先行研究の成果等の盗用や作為的な取り扱いをしていないことが確認された。